紀　　要

第 9 号

1996. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目　　次

序
‘廃棄’を考える－貝塚出土資料の検討にあたっての試論－〔鈴木康二〕 …… 1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動－セタシジミの成長速度と年齢構成－〔稲葉正子〕…… 11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕 …… 16
箆状木製品の用途について〔松澤　修〕 …… 25
縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－〔中村健二〕 …… 38
近江における弥生社会の理解にむけて－その方法と課題－〔大崎康文〕 …… 42
長浜市域における弥生時代の石器－今川東遺跡出土石器を中心に－〔稲葉隆宣〕 …… 51
石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－〔上垣幸徳・松室孝樹〕 …… 57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕 …… 79
近江へのアプローチ・その3－野洲・栗太をフィールドに－〔近江歴史クラブ〕 …… 85
1．野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕 …… 89
2．栗太・野洲における後期古墳の類型的把握
－古墳時代システム論への墓制的アプローチ－〔細川修平〕 …… 94
3．集落遺跡から見た古墳時代の特質－古墳時代システム論への予察－〔細川修平〕 …… 102
4．栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕 …… 110
5．近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕 …… 122
6．古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕 …… 130
7．田原道をめぐる二つの地域〔重岡　卓〕 …… 136
8．近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕 …… 149
9．栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕 …… 157
10．鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論
－滋賀県の事例を中心に－〔大道和人〕 …… 164
栗太・野洲郡のまとめ …… 179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川　靖〕 …… 185
古代遺跡と出土文字資料〔濱　　修〕 …… 200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕 …… 208
巡礼者の宿－鴨田遺跡出土の巡礼札より－〔重田　勉〕 …… 215
焼物二話〔稲垣正宏〕 …… 220
蒲生稲寸氏について－近江古代豪族ノート5－〔大橋信弥〕 …… 224
律令神話に於ける農業神について〔造酒　豊〕 …… 233

日本古代の対外関係史の一様相
　－日本古代史研究ノートあるいは覚書その２－〔芝池信幸〕 …… 238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 …… 243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕 …… 252

鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論

－滋賀県の事例を中心に－

大　道　和　人

1．はじめに

考古学は人間が物資界に与えたすべての変化を対象として研究を進めるが、最も基本となる大きな単位は遺跡である。鉄生産関係を扱う場合に資料とすることができる主要な遺跡を列挙するならば、（a）鉄鉱石や砂鉄の採掘場または採取場と、（b）製鉄炉（溶鉱炉）、鉱滓や炉壁片、炭灰を捨てる場とそれに伴う作業場の大きく２つの種類の遺跡を挙げることができる。うち、（b）については、分布調査等によりその分布をある程度確認できるようになってきており、また、発掘調査が行われその具体的様相が徐々に明らかになってきている。一方、（a）については、砂鉄の採掘場・採取場に関して、近世の「鉄穴流し」、古代・中世の「鉄穴流し」の初形態と想定される事例の幾つかが報告されているが、鉄鉱石（岩鉄）の採掘場・採取場に関しての調査例はほとんどなく、その具体的様相は謎に包まれた状態であると言っても過言ではない。小稿で取り上げる滋賀県の古代鉄生産に関しては、その原料が鉄鉱石であることが判明してきているが、製鉄遺跡と関連する鉄鉱石の採掘場・採取場の分布状況についてはほとんどわかっていない。したがって、（a）の鉄鉱石採掘場と（b）の製鉄遺跡の有機的関係について、考古資料を用いて具体的に検討を行うことは現時点では不可能であるといわざるを得ない。そこで小稿では、滋賀県下で鉄鉱石採掘場が分布している可能性の高い地域を『表層地質図』等により推定し、推定した鉄鉱石採掘候補域と製鉄遺跡の分布とが地理的に如何なる関係があるのかを検討することによって、滋賀県下に分布する製鉄遺跡の性格について考えていきたいと思う。[1]

2．滋賀県下の鉱物・鉱床について

滋賀県には中央に琵琶湖をかかえた盆地が存在し、県境部は一般に高い山となっており、それがちょうど分水嶺となって周りの府県と接している。この県境部の山地の内側にも独立山塊が散在しているが一段低く平坦な丘陵があり、さらに琵琶湖周辺には沖積平野が広がっている。

県境部の山地を構成しているのは秩父古生層や中生代末から新生代初期にかけて貫入したといわれる花崗岩や斑岩類である。平野部に散在している山塊のうち彦根以北のものは古生層であり、彦根以南のものは花崗岩や火成岩（湖東流紋岩類）である。盆地内の丘陵部はおもに新生代後期の古琵琶湖層群や段丘層で、鈴鹿山脈内の丘陵部には小範囲に新第三期の中新統もみられる。このように県内は古生層、中生代末の花崗岩類、新生代の地層からできている。中生代の地層や大規模な塩基性の火成岩、広域変成岩の分布がみられないため、いきおい鉱物や鉱床も限定されたものになっている。

鉱物については、花崗岩中のペグマタイト鉱物と接触帯に見られる接触鉱物がおもなものである。鉱床については、古生層を構成する石灰岩や古生層中に含まれるマンガン鉱床、銅鉱床、接触交代鉱床、花崗岩に伴う長石鉱床、珪石鉱床、花崗岩の風化に関係した粘土鉱床などがおもなものである。うち、小稿で扱う鉄鉱床は、古生層とその後に貫入した花崗岩との接触部にできた接触交代鉱床である。特に接触交代鉱床ではマグマ中のハロゲン化合物などを多く含んだ揮発成分が石灰岩やドロマイトのように化学的に反応しやすい岩石に接すると、それを置き換えて金、銀、銅、亜鉛、鉄などを含む塊状の鉱床をつくることが知られている．このことから、接触交代鉱床には鉄鉱床が存在する可能性が高い．実際、滋賀県下においても高島郡マキノ町マキノ鉱山、甲賀郡石部町カナ山、伊香郡西浅井町等の接触交代鉱床に磁鉄鉱の鉱床の存在が知られ、上記のことを裏付けている。[2]

以上みてきたことからわかるように、古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯において接触交代鉱床が存在する可能性が高く、その中に鉄鉱石の採掘可能な候補地が存在する蓋然性が高いということが想定される。そこで次章では、表層地質図等により、滋賀県下における鉄鉱石の採掘の可能性が高い分布域とこれまでに知られている製鉄遺跡の分布の関係を検討していきたい。

3．滋賀県内各地の様相

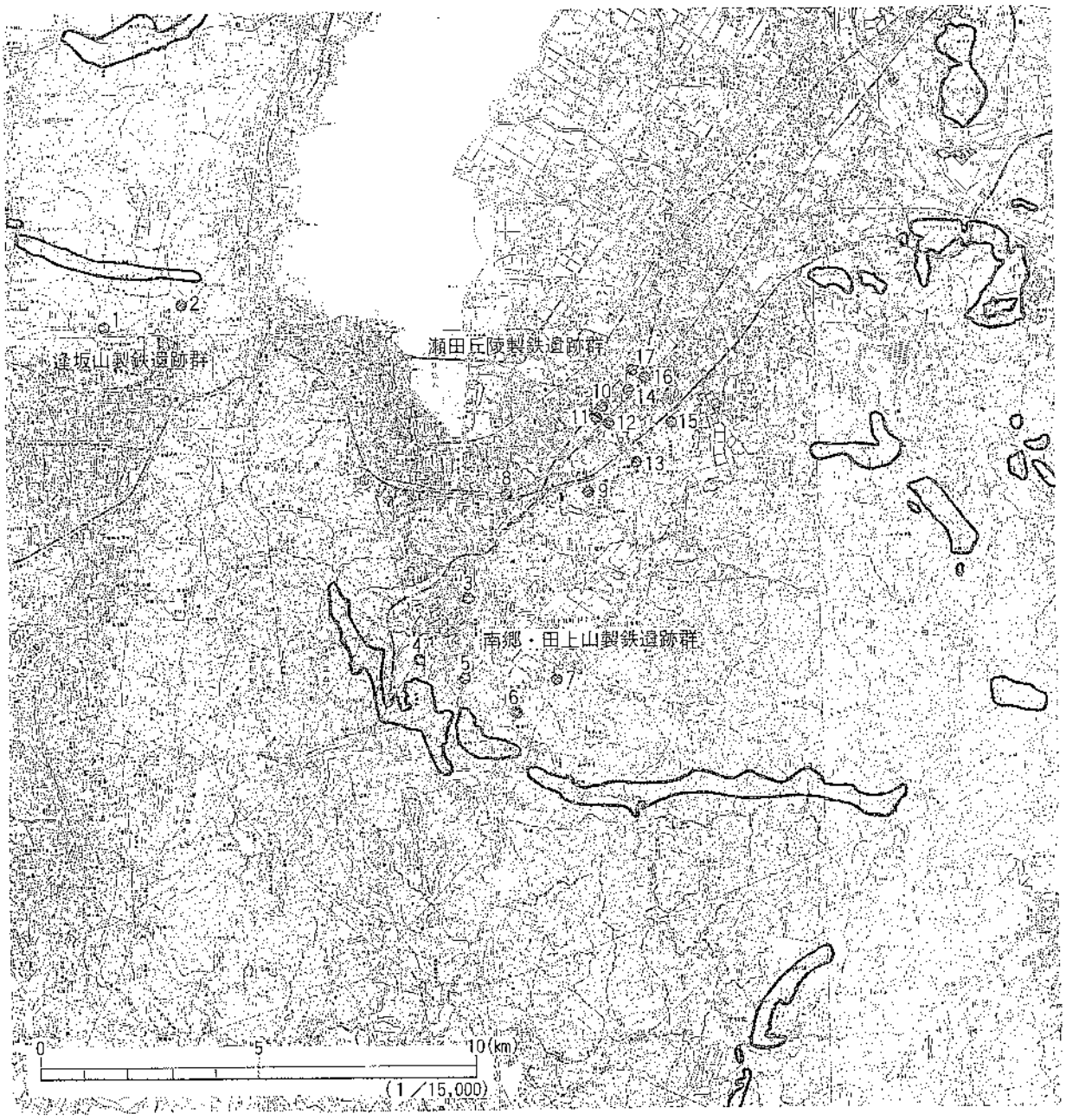
踏査が十分に行われていない湖東地域を除き、滋賀県下では製鉄遺跡が大筋ではほぼ全域に分布していることが判明している。これらの製鉄遺跡は大きな分布域という観点でみると、滋賀県南部（旧郡の滋賀郡南部・栗太郡）、滋賀県西部（旧郡の滋賀郡北部・高島郡南部）、滋賀県北部（旧郡の高島郡北部・伊香郡・浅井郡）という三つに分かれて分布がみられることがわかる。そこで以下では、上記の南部、西部、北部地域の鉄鉱石採掘の可能性の高い分布域、すなわち、古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯の分布域という地質環境を探りだし、[3]次に鉄鉱石採掘の可能性の高い地域と製鉄遺跡の分布との関係を検討し、それらをふまえ製鉄遺跡群の設定を行いたい。なお、滋賀県東部地域については、製鉄遺跡分布状況把握を目的とする分布調査が、現状では十分になされていないと判断され、製鉄遺跡の分布状況が不明確なため小稿では扱わなかった。

（1）滋賀県南部（旧滋賀郡南部・栗太郡・野洲郡南部・甲賀郡西部・宇治郡北部）の様相

小稿で設定した滋賀県南部とは、現在の行政区分では京都市左京区・山科区・大津市南部・草津市・栗太郡・野洲郡・甲賀郡[4]の地域で、古代における宇治郡・滋賀郡南部・栗太郡・野洲郡・甲賀郡の地域に相当する。この地域では京都市山科区から大津市藤尾にかけての地域、大津市南郷地域、大津市田上山北斜面の地域、瀬田丘陵北斜面の地域の四つの地域に製鉄遺跡が分布することが知られている。（第21図）

a．地質環境

当地域における古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯は、京都市左京区法然院付近から大文字山を経て大津市三井寺付近に至る地域（京都市山科）、宇治市陀羅谷町から岩間山、南郷



1．御陵大岩町遺跡　2．藤尾遺跡　3．平津池ノ下遺跡　4．南郷桜峠遺跡　5．山口遺跡
6．関ノ津東遺跡　7．小山池遺跡　8．青江南遺跡　9．源内峠遺跡　10．笠山遺跡
11．月輪南流遺跡　12．三池遺跡　13．獅々舞谷遺跡　14．観音堂遺跡　15．木瓜原遺跡
16．湧済谷遺跡　17．野路小野山遺跡

第21図　滋賀県南部の接触帯と製鉄遺跡の分布

（国土地理院『京都東北部』『京都東南部』『近江八幡』『水口』５万分の１地図による）

桜峠、袴腰山を経て外畑町に至る地域、大津市立木観音付近から鹿跳橋を経て妙見山に至る地域、大津市東町付近から富川町、八筈ケ岳を経て甲賀郡信楽町田代に至る地域（大津市南部）、大津市と栗太郡栗東町の境に位置する鶏冠山を中心とする周辺地域、栗東町竜王山を中心とする周辺地域、栗東町走井から金生山に至る地域、栗東町観音寺を中心とする周辺地域、栗東町常楽寺・常寿寺の南側の地域、阿星山の石部町側の地域（栗東町南部）、栗東町の安養寺山から上砥山に

至る地域、栗東町伊勢落から石部町石部に至る地域、甲西町菩提禅寺を中心とする周辺地域（栗東町中央部・石部町西部・甲西町西部）、野洲町妙光寺山から三上山を経て北桜に至る地域（野洲町南部）にみられる。これらの接触帯内では磁鉄鉱の露頭の存在の可能性が想定され、実際、栗東町伊勢落から石部町石部に至る地域の範囲内に所在するカナ山では磁鉄鉱の露頭を確認することができる。[5]

b．接触帯と製鉄遺跡の関係

古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯と製鉄遺跡との地理的関係について検討していく。

京都市山科の接触帯には山科から藤尾にかけての製鉄遺跡群が近接し、大津市南部の接触帯には南郷の製鉄遺跡群と田上山北斜面の製鉄遺跡群が近接する。このような様相から、上でみた製鉄遺跡では遺跡の谷奥等、近接する接触帯において鉄鉱石を採掘し、製鉄原料に用いた可能性が高い。

一方、栗東町南部、栗東町中央部・石部町西部・甲西町西部、野洲町南部の接触帯に近接する地域では、石部町において五軒茶屋遺跡という江戸時代の製鉄遺跡の存在が確認されているが、古代・中世に遡る製鉄遺跡は確認されていない。[6] しかし、今後分布調査等により製鉄遺跡の存在が確認される可能性は高そうである。その理由については考察のところで述べる。

なお、瀬田丘陵北斜面においては接触帯から離れた場所で鉄生産が行われている。例えば、瀬田丘陵北斜面、分水嶺近くの谷奥に位置する木瓜原遺跡[7]は、栗東町南部の鶏冠山周辺の接触帯と直線距離で約4㎞と、瀬田丘陵に所在する製鉄遺跡の中では接触帯に最も近い遺跡ではあるが、県内の他地域の製鉄遺跡と比較すると、接触帯と離れているという特徴を持つ。また、接触帯の分布する鶏冠山と木瓜原遺跡の間の地形をみていくと、鶏冠山から草津川（草津川右岸）、草津川から瀬田丘陵（草津川左岸・瀬田丘陵南斜面）、瀬田丘陵から琵琶湖（瀬田丘陵北斜面）と三つの地形に分類されることがわかる。接触帯、すなわち、鉄鉱石採掘候補地に近接して製鉄遺跡が分布する他地域の製鉄遺跡の様相を、鶏冠山と木瓜原遺跡を結ぶ地域に当てはめると、草津川右岸か草津川左岸・瀬田丘陵南斜面に製鉄遺跡が存在するのが自然なのだが、その場所には存在せず、瀬田丘陵北斜面に製鉄遺跡が存在している．したがって、接触帯と製鉄遺跡の関係でみる限り、瀬田丘陵北斜面に所在する製鉄遺跡群は、山科から藤尾にかけて分布する製鉄遺跡群や南郷、田上山北斜面の製鉄遺跡群とは異なる特異な形態の製鉄遺跡群と考えるべきであろう。

以上の検討をふまえ、滋賀県南部の接触帯と製鉄遺跡の対応関係から、当該地域の製鉄遺跡群を以下のように設定したい。

京都市山科地域の接触帯－逢坂山製鉄遺跡群

大津市南部地域の接触帯－南郷・田上山製鉄遺跡群

接触帯不明－瀬田丘陵製鉄遺跡群

（2）滋賀県西部（滋賀郡北部・高島郡南部）の様相

小稿で設定した滋賀県西部とは、現在の行政区分では大津市北部・滋賀郡・高島郡南部の地域で、古代における滋賀郡北部・高島郡南部の地域に相当する。この地域では比良山麓に広く分布

1．タタラ谷遺跡　2．守山遺跡　3．城ノ才遺跡　4．椏座山遺跡
5．鏡天神社遺跡　6．北比良遺跡　7．地蔵谷遺跡　8．足田ヶ口遺跡
9．薬師遺跡　10．山崎川遺跡　11．鵜川遺跡　12．明神遺跡

第22図　滋賀県西部の接触帯と製鉄遺跡の分布

（国土地理院『熊川』『北小松』『京都東北部』『竹生島』『彦根西部』『近江八幡』５万分の１地図による）

する製鉄遺跡群の存在がこれまでの分布調査等で知られている。[8]（第22図）

a．地質環境

当該地域における古生層とその後の貫入した花崗岩との接触帯は、京都市左京区野瀬町付近から延暦寺を経て大津市日吉大社へ至る地域、京都市と大津市の境界に位置する水井山・横高山を中心とする周辺地域、京都市左京区大原三千院東側の京都府と滋賀県の境界付近、京都市左京区小出石町付近から大津市上在地町付近に至る地域、大津市伊香立付近から上龍華町付近に至る地域、京都市左京区途中町付近から志賀町権現山付近に至る地域（大津市北部）、志賀町木戸・荒川の西側の比良山麓、志賀町木戸西側の比良山麓から比良山、武奈ケ岳を経て高島町八淵滝付近に至る地域、高島町黒谷付近から富坂付近に至る地域（志賀町・高島町南部）にみられる。これらの地域では磁鉄鉱の鉱床の露頭が確認される可能性があるといえる。

b．接触帯と製鉄遺跡の関係

古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯と製鉄遺跡との地理的関係について検討していく。

大津市北部の接触帯には現在知られる限りでは志賀町タタラ山遺跡[9]と二口遺跡[10]の二遺跡が近接している。ただし、一般的に古代の製鉄遺跡は遺跡群を構成することが多く、製鉄遺跡が1ヶ所発見されると芋蔓式に周辺で複数発見されることが通常なので、今後遺跡の存在が確認される可能性もあり、製鉄遺跡群を構成する可能性も残されている。また、志賀町・高島町南部の接触帯には比良山麓に広く分布する製鉄遺跡群が近接する。以上の様相から上でみた製鉄遺跡群では、近接する接触帯で鉄鉱石を採掘し製鉄原料に用いた可能性が高い。

以上の検討をふまえ、滋賀県西部地域の接触帯と製鉄遺跡の関係から、当該地域の製鉄遺跡群を以下のように設定したい。

大津市北部地域の接触帯－和邇製鉄遺跡群

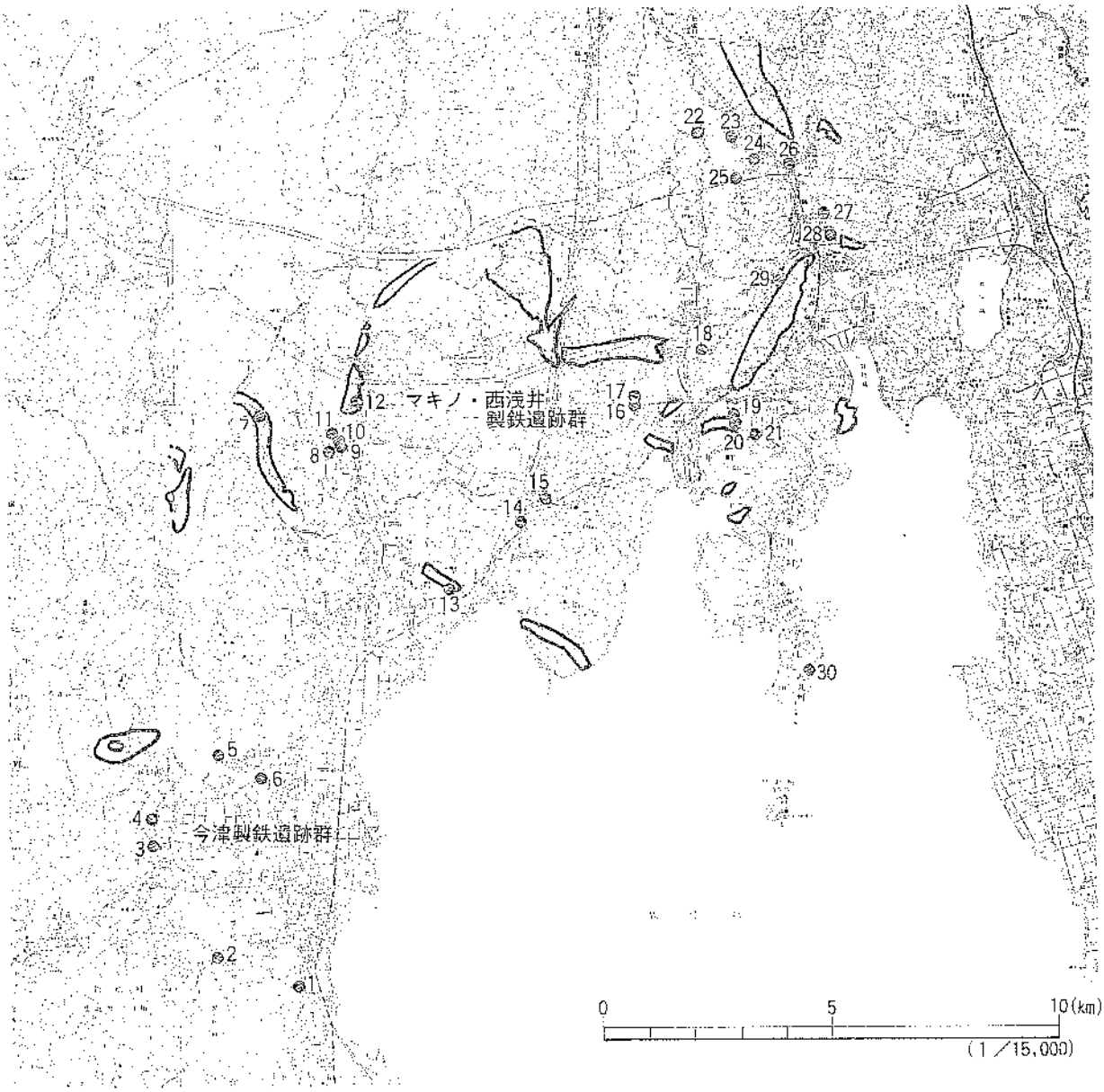
志賀町・高島郡南部地域の接触帯－比良山麓製鉄遺跡群

（3）滋賀県北部（高島郡北部・伊香郡・浅井郡）

小稿で設定した滋賀県北部とは、現在の行政区分では高島郡北部・伊香郡・東浅井郡の地域で、古代における高島郡北部・伊香郡・浅井郡の地域に相当する。この地域では今津町箱館山麓から饗庭野にかけての地域、マキノ町知内川及びその支流である八王子川右岸の牧野・白谷の地域、マキノ町大谷山麓、西浅井町大浦川流域、西浅井町・高月町境界の葛籠尾崎の地域、木之本町古橋に製鉄遺跡の分布が知られている。（第23図・第24図）

a．地質環境

当該地域における古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯は、今津町箱館山を中心とする周辺地域（今津町箱館山周辺）、マキノ町大谷山を中心とする周辺地域、マキノ町白谷温泉より北の八王子川右岸、マキノ町乗鞍岳付近から西浅井町庄付近に至る地域、マキノ町山崎山南山麓、マキノ町海津大崎付近、西浅井町黒山付近、西浅井町小山付近、西浅井町大浦付近、西浅井町小山付近から塩津中付近に至る地域、西浅井町月出峠付近、西浅井町沓掛付近、西浅井町野坂付近（マキノ町・西浅井町）、浅井町金糞岳付近から鍛冶屋付近に至る地域（浅井町東部）にみられ

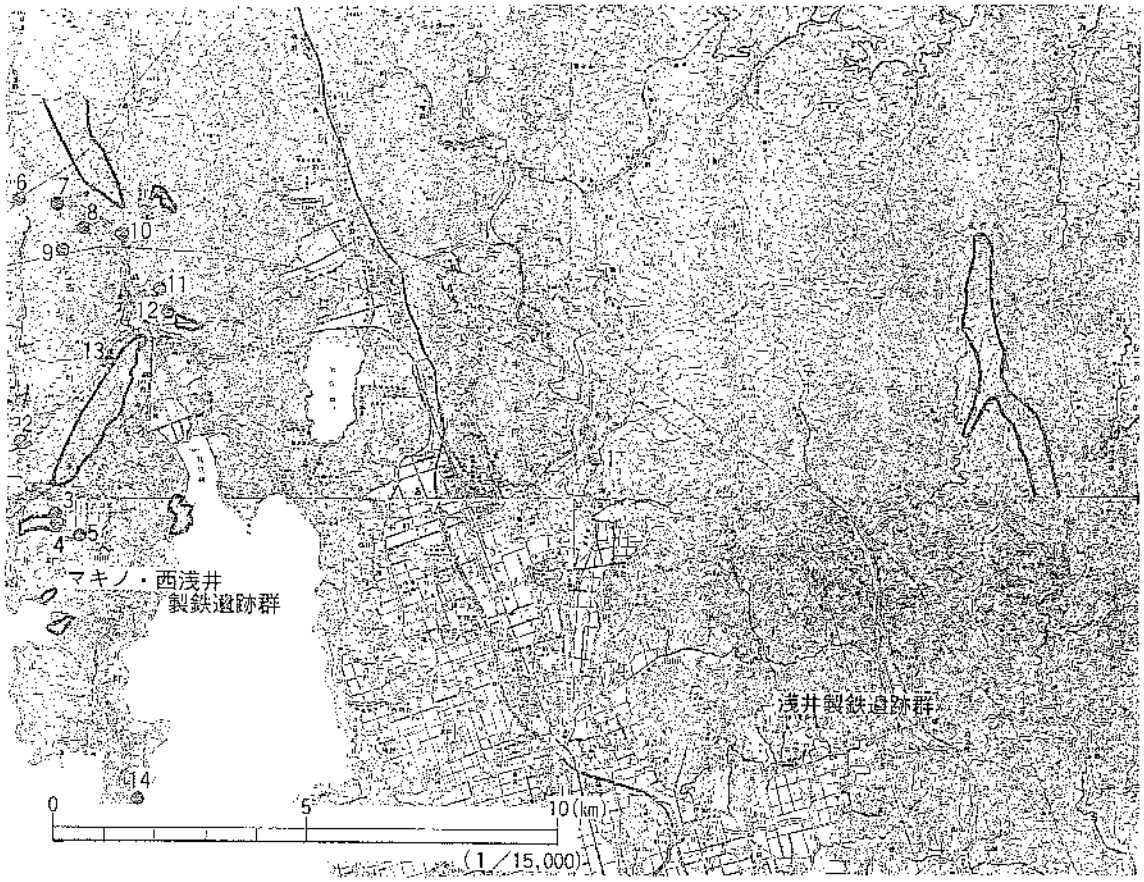


1．木津製鉄遺跡	2．東谷遺跡	3．山本遺跡	4．谷八幡遺跡	5．酒波谷遺跡
6．酒波三ツ又遺跡	7．大谷川遺跡	8．北牧野D遺跡	9．北牧野A遺跡	10．北牧野E遺跡
11．北牧野C遺跡	12．白谷遺跡	13．天神社裏山A遺跡	14．海津B遺跡	15．小荒路遺跡
16．黒山B遺跡	17．黒山A遺跡	18．大浦A遺跡	19．ひくれ谷遺跡	20．小山A遺跡
21．小山B遺跡	22．金具曽遺跡	23．沓掛西遺跡	24．沓掛南遺跡	25．日計山遺跡
26．集福寺南遺跡	27．余村東遺跡	28．余村南東遺跡	29．横波遺跡	30．寺ヶ裏遺跡

第23図　滋賀県北部の接触帯と製鉄遺跡の分布

（国土地理院『西津』『熊川』『北小松』『敦賀』『竹生島』『彦根西部』 5万分の1地図による）

る。これらの地域では磁鉄鉱の鉱床の露頭が確認される可能性があるといえる。実際、マキノ町大崎のものは、磁鉄鉱を鉱石として採掘を試みたとの報告のあるマキノ鉱山として知られており、化学成分についても示されている。[11] また、マキノ町大谷山を中心とする周辺地域のうち石庭から大谷川を2㎞程遡ったところに、古代鉄穴の可能性の指摘される場所が3ヶ所あり、太平洋戦争中に一時鉄鉱石の採掘をしたと言われている（大谷川遺跡）。更に第23図の接触帯の分布域から



1．古橋遺跡　2．大浦A遺跡　3．ひくれ谷遺跡　4．小山A遺跡　5．小山B遺跡
6．金具曽遺跡　7．沓掛西遺跡　8．沓掛南遺跡　9．日計山遺跡　10．集福寺南遺跡
11．余村東遺跡　12．余村南東遺跡　13．横波遺跡　14．寺ヶ裏遺跡

第24図　滋賀県北部（古橋遺跡周辺）の接触帯と製鉄遺跡の分布

（国土地理院『敦賀』『竹生島』『横山』『長浜』5万分の1地図による）

は若干外れているが、沓掛南遺跡より谷川沿いに300m程登ったところの日計山麓の谷底から斜面にかけて鉄鉱石の産出地と村人が伝えている場所があるという（日計山遺跡）。[12]

b．接触帯と製鉄遺跡の関係

古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯と製鉄遺跡との地理的関係について検討していく。

今津町の接触帯には箱館山麓から饗庭野にかけての製鉄遺跡群が、また、マキノ町・西浅井町の接触帯には牧野・白谷、大谷山麓、大浦川流域、葛籠尾崎の製鉄遺跡群が近接する。浅井町東部の接触帯に近接する製鉄遺跡は、遺跡地図等には掲載されていないが、浅井町東部の接触帯に近接する地域においては、時期や内容は不明ながら、製鉄に関わる鉱滓の散布地がみられ、[13]また、近隣地域の調査に於いて集落遺跡から製錬滓と想定される鉄滓が出土する例が[14]見つかってくるようになってきたことから、ほぼ確実に製鉄遺跡の存在が明らかになってきたと言えよう。なお、古橋遺跡については浅井町東部の接触帯に続く滋賀・岐阜県境の接触帯と約9kmと離れてはいるが、接触帯から杉野川を一直線に下ってきた地点に遺跡が立地しており、原料の搬入は比較的容易であったと推定される。[15]このことから、当遺跡は浅井町東部の接触帯に近接する製鉄遺跡とみ

ておきたい。

以上の検討をふまえ、滋賀県北部地域の接触帯と製鉄遺跡の関係から、当該地域の製鉄遺跡群を以下のように設定したい。

今津町箱館山周辺地域の接触帯－今津製鉄遺跡群

マキノ町・西浅井町地域の接触帯－マキノ・西浅井製鉄遺跡群

浅井町東部地域の接触帯－浅井製鉄遺跡群

4．考　察

これまで、鉄鉱石の採掘場として想定されうる古生層とその後に貫入した花崗岩との接触帯の分布と製鉄遺跡との関係、及びそこで得られた関係から推定される製鉄遺跡群の設定を滋賀県の南部、西部、北部の三地域について具体的に検討を行ってきた。ここでは、以上の検討の結果得られたことを基に、製鉄遺跡群の類型化と個々の類型の性格付けについて若干の考察を行っていきたい。

（1）製鉄遺跡群の類型化

接触帯と製鉄遺跡の関係から、県南部地域においては逢坂山製鉄遺跡群、南郷・田上山製鉄遺跡群、瀬田丘陵製鉄遺跡群の3遺跡群を、県西部地域においては和邇製鉄遺跡群、比良山麓製鉄遺跡群の2遺跡群を、県北部においては今津製鉄遺跡群、マキノ・西浅井製鉄遺跡群、浅井製鉄遺跡群の3遺跡群の計8ヶ所を製鉄遺跡群として設定した。

これら製鉄遺跡群のうち、逢坂山製鉄遺跡群、南郷・田上山製鉄遺跡群、和邇製鉄遺跡群、比良山麓製鉄遺跡群、今津製鉄遺跡群、マキノ・西浅井製鉄遺跡群、浅井製鉄遺跡群は、接触帯、すなわち鉄鉱石採掘地に近接して製鉄遺跡群が存在する形態とみることができる。この類型の製鉄遺跡群では、製鉄遺跡の背後に広がる山林の谷筋や斜面を上がった所に接触帯やスカルン地帯が存在することが多いので、製鉄遺跡の背後の山林を鉄鉱石採掘地として利用している可能性が高い。したがって、これらの遺跡群は鉄鉱石採掘地と製鉄遺跡の地理的関係が強いということで、「原料立地型」の製鉄遺跡群として類型化する。

瀬田丘陵製鉄遺跡群は鉄鉱石採掘地が存在せず、遠方より製鉄原料である鉄鉱石を運搬する必要が生じる形態とみることができる。この形態は先にみた「原料立地型」の製鉄遺跡群と異なり、製鉄遺跡の背後に広がる山林の谷筋や斜面を上がった所に接触帯やスカルン地帯が存在しないことから、製鉄遺跡の背後の山林を鉄鉱石採掘地として利用していない。「製鉄原料の確保」という限定的な観点からみると、製鉄遺跡とその背後に広がる山林との関係が希薄であるということが読み取れる。したがって、瀬田丘陵製鉄遺跡群は鉄鉱石採掘地と製鉄遺跡の地理的関係が希薄であるということで、「非原料立地型」の製鉄遺跡群として類型化する。

さらに県南部の栗東町中央部・石部町西部・甲西町西部、野洲町南部の様相のところで触れたが、鉄鉱石採掘可能な場所が近接しているのにもかかわらず製鉄遺跡が確認されていない形態「未確認型」として類型化する。

（2）個々の類型の性格付け

ここでは、先に行った各類型の性格付けを、これまでに行われた発掘調査・分布調査等で得られた考古学的成果や今回行った鉄鉱石採掘地と製鉄遺跡群の検討をふまえ、須恵器生産等他の手工業生産、地域開発などと関連付けて考えていきたい。なお、製鉄遺跡を分布調査レベルで年代を決定するのは現段階では至難の業であり、製鉄遺跡の具体的様相を検討する資料としては発掘調査で得られた結果が中心となるのは仕方のない所であろう。その意味で、発掘調査や分布調査が県下の他地域と比較し多くなされている滋賀県南部の事例が検討資料の中心となっている。

a．原料立地型

まず、原料立地型の製鉄遺跡群の操業年代についてみていきたい。県下の操業年代の大筋が判明している原料立地型の製鉄遺跡としては、詳細な表面調査・測量調査の行われた逢坂山製鉄遺跡群の山科区御陵大岩町遺跡（7世紀代）[16]、発掘調査の行われた南郷・田上山製鉄遺跡群の大津市南郷桜峠遺跡（7世紀前半代）[17]、大津市平津池ノ下遺跡（8世紀後半～末）[18]、マキノ・西浅井製鉄遺跡群のマキノ町北牧野製鉄A遺跡（8世紀代）[19]、今津製鉄遺跡群の新旭町木津遺跡（8世紀末～9世紀初頭）[20]が知られている。そのうち御陵大岩町遺跡に近接する山科区旭山古墳群E－2・E－10（7世紀前半代）[21]や浅井製鉄遺跡群に近接する浅井町城山古墳（7世紀中葉）[22]では供献鉄滓の事例が知られており、周辺遺跡の状況が初期製鉄地帯である岡山県や福岡県と同様の様相を呈している。現時点において公表されている資料を見る限りでは、原料立地型の製鉄遺跡群は滋賀県下においては7世紀前半には出現しているとみるのが妥当であり、日本列島でも比較的早い時期に鉄生産が開始された形態であるといえよう。[23]そして、8世紀末の段階にまでは連綿と操業が続けられたとみてよい。

次に、その性格について、他の手工業生産や地域開発との関連で考えていきたい。年代的な問題は残るが、鉄生産と須恵器生産が同一地域で行われている事例を挙げるならば、逢坂山製鉄遺跡群と山科古窯址群、南郷・田上山製鉄遺跡群と南郷古窯址群（奈良時代前半～平安時代）、和邇製鉄遺跡群と堅田古窯址群（6世紀末・TK209～10世紀代）、今津製鉄遺跡群と甍庭野古窯址群（7世紀前半・TK209～9世紀代）、浅井製鉄遺跡群と木尾内野神古窯址群（7世紀前半～7世紀代）を挙げることができる。[24]これらの事例から、県下の原料立地型の製鉄遺跡群はマキノ・西浅井製鉄遺跡群と比良山麓製鉄遺跡を除き、6世紀末以降に須恵器生産が出現する地域に展開することがわかる。

県内の須恵器生産を中心とする手工業生産の検討を行った畑中氏は、須恵器生産の為にのみ山林を領有している「須恵器専業」の森林資源利用形態と、森林開発や森林資源の活用の一部門として存在するという「須恵器非専業」の森林資源利用形態が存在するとし、特に後者においては、6世紀末に出現する須恵器生産は「須恵器非専業」の形態が一般的であるとする。[25]先にみたように古窯址群と原料立地型の製鉄遺跡群が同一地域に存在していることが多く、それらの古窯址群の大部分が6世紀末に生産を開始する「須恵器非専業」であることから、「須恵器非専業」の森林資源利用形態を行う地域の中に、接触帯が存在するところで鉄生産が行われたということが言

えよう。つまり、原料立地型の製鉄遺跡群のうち、古窯址群が近接して存在している場合は、須恵器生産も鉄生産も森林開発や森林資源の活用の一部門としての性格を持つ可能性が高いといえ、まさに地域「開発」の一貫としての鉄生産という性格が強いことを指摘できよう。

古窯址群の伴わないマキノ・西浅井製鉄遺跡群、比良山麓製鉄遺跡群については、「鉄専業」の森林資源利用形態ということができるであろう。なお、7世紀代の南郷・田上山製鉄遺跡群、8世紀代の浅井製鉄遺跡群も「鉄専業」に含まれる。『続日本紀』天平宝字6年（762）2月25日条に「大師藤原恵美朝臣押勝に近江国浅井・高島二郡の鉄穴　各一処を賜ふ」とあり、8世紀中葉の最有力者の一人である藤原仲麻呂が近江の「鉄穴」を所有したことがわかる。[26] この8世紀中葉に「鉄専業」の製鉄遺跡群である可能性の高いマキノ・西浅井製鉄遺跡群、比良山麓製鉄遺跡群、浅井製鉄遺跡群と「浅井・高島二郡の鉄穴」の地域が一致することは十分に評価すべき事象であろう。また、マキノ・西浅井製鉄遺跡群内に所在する北牧野・西牧野古墳群の経済的基盤を鉄生産に求め、マキノ・西浅井製鉄遺跡群の中に古墳時代後期（6世紀代）にまで遡る製鉄遺跡の存在の可能性を指摘した論考も傾聴に値するであろう。[27]

上記の三製鉄遺跡群で構成される「鉄専業」の森林資源利用形態をとる原料立地型の製鉄遺跡の発掘調査は現在までのところほとんど行われておらず、操業年代をはじめその具体的様相は不確実なところが多いので、その性格の検討は今後の大きな課題となる。しかし、敢えてその性格について述べることが許されるならば、同一地域で須恵器生産が行われている原料立地型の製鉄遺跡群で想定したような地域「開発」の為というよりは、その名の通り鉄を専らに生産することを目的に制定された生産遺跡群といえ、大規模な生産で、都城をはじめ多くの地域で自給しきれない需要を、調庸ルートとともに満たしていくというような性格が主体であった可能性をここでは指摘しておきたい。[28]

b．非原料立地型

県下の非原料立地型の製鉄遺跡群として、確実なものは瀬田丘陵製鉄遺跡群に限られる。瀬田丘陵製鉄遺跡群では、源内峠遺跡（7世紀中頃）、[29] 月輪南流遺跡（7世紀中頃）、[30] 観音堂遺跡（7世紀末）、[31] 木瓜原遺跡（8世紀前半）、[32] 野路小野山遺跡（8世紀中頃）[33] の6遺跡において発掘調査がなされており、これらの遺跡は瀬田丘陵の分水嶺を境にして北側斜面のみに南西から北東へと展開している。以上のことから、その操業年代は、源内峠遺跡の7世紀中頃から野路小野山遺跡の8世紀中頃の年代に非原料立地型の製鉄遺跡群が展開することが読み取れる。

須恵器生産との関連では、源内峠遺跡と同時期の須恵器生産遺跡としては、山ノ神遺跡、[34] 笠山遺跡[35] が挙げられ、製鉄遺跡と須恵器生産遺跡両者の距離は約2㎞でそれ程離れていないと判断でき、また、観音堂遺跡、木瓜原遺跡に至っては多少の時期のずれはあるが鉄生産と須恵器生産が場を共有する現象がみられる．上記の事象から、瀬田製鉄遺跡群では鉄生産と須恵器生産との距離が、他の原料立地型の製鉄遺跡群と比較すると近距離であることが指摘でき、更に7世紀末から8世紀前半にかけては同一遺跡で両生産が行われていることは特筆すべき事例として挙げることができよう。

以上の現象からは、各製鉄遺跡の「開発」エリアはかなり狭く、中小河川流域に広がる丘陵・平野・山林といった極地的ともいえる範囲ともみてとれるが、製鉄遺跡群全体からみると、7世紀中頃から8世紀中頃という約100年をかけて栗太郡南半分の瀬田丘陵全体を汲まなく開発するというように、かなり大掛かりで計画的な開発の中に組み込まれた鉄生産であると指摘することができよう。非原料立地型の鉄生産においては、原料の運搬という原料立地型の鉄生産ではさほど関連の無い工程が介在しているが、この原料の運搬も瀬田丘陵全体の開発の中に計画的に組み込まれていた可能性は高い。このあり方は近江では特異であるといえ、近江国庁をはじめとする官衙施設が瀬田丘陵南端部に集中することと密接な関係があったといえよう。

c．未確認型

次に、「未確認型」について考えていきたい。今回検討した地域では栗東町南部・栗東町中央部・石部町西部・甲西町西部・野洲町南部と大津市北部の接触帯に近接する地域が該当する。

栗東町南部・栗東町中央部・石部町西部・甲西町西部・野洲町南部は野洲川下流域と呼ばれる地域を含んでいる。野洲川下流域の古代豪族、特に左岸地域の小槻山君と右岸の安県を中心に、考古・文献史料の両面から検討を加えた大橋信弥氏は、小槻山君が瀬田丘陵の製鉄に深く関っていた可能性を指摘している。その理由として、小槻山君が「山君」を称し、山部を管理していたことと関連するとし、その山部は、山林生産物の貢納のみならず、鉄生産にかかわるものもみられるとすること、小槻山君の本拠地が栗太郡であること、更に、野洲町左岸地域の首長墓や集落から、豊富な鉄製品の出土が知られること等を考慮し、小槻山君氏が、古墳時代の鉄器生産・鉄製品所有の伝統を持つ可能性が高いことを挙げている。つまり、小槻山君による栗太郡内の古墳時代の鉄器生産・鉄製品の所有から、7世紀・8世紀の鉄生産という一貫した流れを指摘しているのである。[36]

ふりかえって、栗東町南部・栗東町中央部・石部町西部・甲西町西部・野洲町南部に分布する接触帯をみてみると、そこは小槻山君の中心勢力下の背後に広がる山林地帯であることがわかる。したがって、現在製鉄遺跡の存在は知られていないが、その接触帯に近接する製鉄遺跡群が展開する可能性は非常に高いといえる。

また、大津市北部に関しては、延暦寺の寺域内に取り込まれるように接触帯が分布しているので、そのような場所では製鉄が行われなかったのかもしれない。また、全く逆の意味になるが、鉱石採掘可能地を含む山林所有のための役割を寺院が果たした可能性もあるのかもしれない。現段階ではこのことは証明する術を持たないが、古代において寺院が地域開発のシンボルとなったと考えられる事例が幾つかあることからも、[37]今後鉱石採掘を含む、山林の領有・開発に寺院が果たした役割を検討していく必要はあろう。

5．おわりに

滋賀県の古代製鉄の原料としては鉄鉱石が使用されていることが以前より知られてきたが、鉄鉱石採掘地の様相については全く不明であった。小稿では、鉄鉱石の採掘可能地が古生層とその

後に貫入した花崗岩との接触帯に存在する可能性が高いという地学的見地に基づき、滋賀県下の製鉄遺跡の分布と接触帯の分布の検討を行なった。その結果、接触帯に近接して製鉄遺跡群が分布する形態（「原料立地型」製鉄遺跡群）、接触帯と離れて製鉄遺跡群が分布する形態（「非原料立地型」製鉄遺跡群）、接触帯は存在するがその近隣に製鉄遺跡が見つかっていない地域（「未確認型」）という三つの類型が存在することが確認された。更に、個々の類型の性格としては、「原料立地型」製鉄遺跡群には、古窯址群を伴わないもの（「鉄専業」）と伴うもの（「非鉄専業」）があり、前者に対しては比較的大規模な生産が想定され、都城や地域で自給しきれない需要を、調庸ルートとともに満たしていくというような性格を、後者に対しては地域「開発」の為の性格を指摘した。「非原料立地型」の製鉄遺跡群には大掛かりで計画的な特殊な「開発」の為に、他の手工業とともに鉄生産が行なわれるという性格が高いことを指摘した。「未確認型」は、製鉄遺跡が確認されていないのでその性格については確実なことは言えず、今後製鉄遺跡が確認される可能性の高い地域を幾つか指摘することのみにとどまった。

しかし、鉄鉱石採掘遺跡の確認はほとんどなされていないと言っても過言でなく、実態は大部分が不明であり、その不明事象を基礎に論考を行なった小稿は、標題の通り「試論」の域を出ていないことは否めない。今後接触帯を中心に目的意識を持った分布調査を行うことにより鉄鉱石露頭場所の確認、鉄鉱石採掘遺跡の確認等が必要であることが痛感され、その作業が行なわれてこそ小稿で行った作業の意味が初めて達成されることとなろう。近江の鉄生産をめぐる課題は数多く残されていると言える。

註

(1) 滋賀県下の鉄資源の分布と製鉄遺跡の関係について検討を行った研究としては、丸山竜平氏による論考がある。丸山氏が鉄鉱石の産地候補地を花崗岩と古生層の接触地帯に求めている点は小稿と同様であり、鉱石産地候補地と製鉄遺跡の地理的関係についてはほぼ同様の結果となっている。

丸山竜平「近江製鉄史序論」（『日本史論叢』第8輯　日本史論叢会　1980年）

(2) 辻一信・北原隆男「滋賀県下のおもな鉱物・鉱床」（『滋賀県の自然　総合学術調査研究報告』滋賀自然環境研究会　1979年）

(3) 各地の地質環境の検討にあたっては、以下の諸文献を参考にした。

前掲註(2)

滋賀県高等学校理科教育研究会地学部会編「滋賀県の地学めぐり」（『滋賀県地学のガイド』コロナ社　1980年）

「表層地質図」（『土地分類基本調査　京都東北部・京都東南部・水口』滋賀県・京都府　1982年）

「表 層 地 質」（『土地分類基本調査　近江八幡』滋賀県　1982年）

「表層地質図」（『土地分類基本調査　北小松』滋賀県　1982年）

「表層地質図」（『土地分類基本調査　西津・熊川』滋賀県　1988年）

「表層地質図」（『土地分類基本調査　竹生島』滋賀県　1987年）

「表層地質図」（『土地分類基本調査　今庄・冠山・敦賀・横山』滋賀県　1990年）

(4) なお、野洲郡と甲賀郡には今のところ古代の製鉄遺跡の確認がなされていないが、栗太郡に接する野洲郡南部と甲賀郡西部は、地質環境上栗太郡との関係が強いため滋賀県南部に含め検討を行った。

(5) カナ山の磁鉄鉱露頭に関しては、丸山竜平氏・千歳則雄氏・高塚秀治氏・真鍋成史氏より多くのご教示をうけた。

(6) 千歳則雄氏より栗東町上低山付近で鉱滓を採集できる場所があるとの御教示を受けたが確認を行っていないので小稿では省いた。

(7) 横田洋三「木瓜原遺跡の発掘」（『古代コンビナート　立命館びわこ・くさつキャンパス　木瓜原遺跡の発掘』立命館大学　1994年）

(8) 当該地域では近年丸山竜平氏や小熊秀明氏らが勢力的に製鉄遺跡の分布調査を行っており、遺跡地図に登録されている以上の製鉄遺跡を確認している。

小熊秀明「湖西の製鉄遺跡の現状」（皇子山を守る会　第84回例会『近江の古代製鉄遺跡の動向』発表レジメ　皇子山を守る会　1995年）

高塚秀治・斎藤務・田口勇「古代近江の鉄生産について」（『第17回古文化財科学研究会大会講演要旨集』第17回古文化財科学研究会大会実行委員会　1995年）

(9) 小熊秀明（『比良ゴルフ倶楽部造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』志賀町教育委員会　1987年）

(10) 前掲註(8)

(11) 通産省鉱業審議会鉱山部会編（『国内鉄鉱鋼原料調査』第4報　1966年）

芹沢正雄「採集鉄滓による北牧野製鉄遺跡の考察と『水碓』の解釈について」（『たたら研究』第22号　たたら研究会　1980年）

(12) 森浩一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告」（『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部文化学科　1971年）

(13) 畑中英二氏・山本孝行氏のご教示による。

畑中英二「滋賀県下における律令期須恵器生産の動向に関する検討」（『紀要』第2号　滋賀県立安土城考古博物館　1994年）

(14) 畑中英二氏・山本孝行氏のご教示による。

浅井町内保遺跡で奈良時代ないしそれ以前に遡る土器群と製錬滓が採集されたとの報告がなされている。

前掲註(1)

(15) 丸山竜平・濱修・喜多貞裕「滋賀県下における製鉄遺跡の諸問題」（『考古学雑誌』第72巻第2号　日本考古学会　1986年）

古橋遺跡周辺では製鉄遺跡の存在が確認されていないので、当地域において製鉄遺跡群が形成されていたか否かという課題が残る。

(16) 中井正幸ほか（『大岩たたら跡』京都考古学研究会　1983年）

(17) 田中勝弘・用田政晴（『南郷遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1988年）

(18) 調査担当者の大津市教育委員会青山均氏のご教示による。

(19) 前掲註(12)

(20) 丸山竜平ほか（『国道161号線高島バイパス遺跡遺跡分布調査概要報告書』滋賀県教育委員会　1971年）

(21) 木下保明ほか（『旭山古墳群発掘調査報告　㈶京都市埋蔵文化財研究所　1981年）

(22) 前掲註(1)

(23) 大道和人「高島郡の鉄生産とその周辺」（『紀要』第7号　㈶滋賀県文化財保護協会　1994年）

(24) 畑中英二「滋賀県下における律令期須恵器生産の動向に関する検討」（『紀要』第2号　滋賀県立安土城考古博物館　1994年）

(25) 畑中英二「滋賀県下における手工業生産－7世紀後半代の様相を中心に－」（『北陸古代土器研究』第5号　北陸古代土器研究会　1995年）

(26) 青木和夫・稲岡耕二・篠山晴生・白藤禮幸校注（新日本古典文学大系『続日本紀』三　岩波書店　1995年）

(27) 前掲註(12)

丸山竜平「各地域の製錬・鍛冶遺構と鉄研究　近畿地方」（たたら研究会編『日本古代の鉄生産』六興出版　1991年）

細川修平「高島郡における製鉄の問題から－6世紀を考える為の序章－」（『紀要』第8号　㈶滋賀県文化財保護協会　1995年）

(28)　文献史料より古代の鉄生産の検討を行った論考として以下の論文がある．

原島礼二「文献にあらわれた鉄」（『日本古代文化の探求・鉄』社会思想社　1974年）

桂敬・高塚秀治・福田豊彦「広島県と滋賀県における岩鉄製鉄－初期製鉄における資源の質をめぐって－」（『日本歴史』第448号　日本歴史学会　1985年）

(29)　近藤滋（『源内峠遺跡試掘調査報告書』滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1978年）

前掲註(15)

(30)　調査担当者の大津市教育委員会田中久雄氏のご教示による。

(31)　藤居朗「草津市観音堂遺跡の調査結果からみた瀬田丘陵の鉄生産」（『滋賀考古』第13号　滋賀考古学研究会　1995年）

(32)　前掲註(7)

(33)　大橋信弥・別所健二・平井寿一・大崎隆志・松村浩（『野路小野山遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・草津市教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　1990年）

(34)　須崎雪博（『山の神遺跡発掘調査報告書』大津市教育委員会　1985年）

須崎雪博（『山の神遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大津市教育委員会　1985年）

(35)　畑中英二「滋賀県笠山古窯出土遺物の紹介」（『紀要』第6号　㈶滋賀県文化財保護協会　1993年）

(36)　大橋信弥「野洲川下流域の古代豪族の動向－近江古代豪族ノート4－」（『紀要』第3号　㈶滋賀県文化財保護協会　1990年）

(37)　重岡卓「古代寺院－軒丸瓦の文様から－」『紀要』第8号　㈶滋賀県文化財保護協会　1995年）

編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年は当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしえの渡りびと－近江の渡来文化－』や、それと関連したシンポジュームを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。　平成８年３月

平成８年３月

紀　要　第９号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本　富士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668